

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

「聞き返し」の表現意図と印象
—日本語学習者と日本語母語話者の会話場面—

伊藤 茉莉奈

2016年3月

1.序論

筆者は、筆者自身の学習言語である英語を使って会話をしていた際、「聞き返し」の表現形式が実際にコミュニケーション上の問題になるということを経験した。この経験から、筆者は「聞き返し」の表現意図と表現形式の関係、「聞き返し」の印象と表現形式の関係に興味を持つようになった。その後、日本語学習者との会話中にも「聞き返し」におけるコミュニケーション上の問題が生じたことにより、日本語教育における「聞き返し」の指導について調べることにした。

日本語教育において「聞き返し」を取り扱った教科書や参考書は少ない。「聞き返し」が取り扱われているとしても、「え？」や「もう一度お願いします」といった定型表現が提示されるのみである。トムソン(1994)は「聞き返し」の練習を取り入れている教科書が少ないため、「聞き返し」のコミュニケーションストラテジーを指導する必要があると主張している。「聞き返し」の指導が十分に行われていなければ、日本語学習者が日本語を使用して会話をする際、「聞き返し」がコミュニケーション上の問題となることが推測される。したがって、日本語学習者が、「聞き返し」を適切に使用してコミュニケーションをとることができるようになるための研究をすることには意義がある。

そこで本稿では、目的を二つ設定する。一つ目の目的は、日本語学習者が「聞き返し」で表現意図を理解主体に伝えられるようになるためにはどうすればよいか、提案することである。二つ目の目的は、日本語学習者が「聞き返し」で理解主体に意図せぬマイナスの印象を持たれないようにするためにはどうすればよいか、提案することである。

2.先行研究

「聞き返し」は、これまで主にコミュニケーションストラテジーの観点から研究が行われてきた。関連領域では、談話分析研究や第二言語習得研究が挙げられる。本研究は、コミュニケーションストラテジーの観点を踏襲しているため、本稿においては「聞き返し」という言葉を使用する。

本稿では、尾崎(1992)と尾崎(2001)の定義を参考に、「聞き返し」とそうでない行動を区別する。本稿では、話し手が、聞き手の反応に応じて「うん」「ええ」などの肯定表現で返答したり、「反復、言い換え、説明などの発話調整」を行ったりした場合は、聞き手が話し手の言葉を繰り返す表現形式を使っても、聞き手が話し手の言葉を繰り返さない表現形式を使っても、その両方を「聞き返し」であるとする。

尾崎(1992)は、1対1の会話で使われる「聞き返し」の表現を指導すること、「聞き返し」表現の丁寧さも考慮して指導すること、相づちの指導や話題を広げる教育の重要性の三点について言及し、日本国内で学んでいる学習者の所属する機関別に会話データを取り、調査対象とすることを今後の課題としている。堀内(2011)は、学習者のレベル別に「聞き返し」の調査を行った。その結果、学習者の日本語レベル別に使用されている「聞き返し」の表現形式が明らかになった。しかし、「聞き返し」の表現意図に関しては明らかにしていない。許(2013)は、学習者の日本語レベル別に「聞き返し連鎖」で学習者が用いる「聞き返し」の表現形式を明らかにしている。しかし、「聞き返し」の表現意図については注目していない。

会話中に行われる「聞き返し」は、言語形式だけでなく音声とジェスチャーを伴って表出される。音声的要素を含むパラ言語情報を調査対象とする必要性について、戸田(2002)が言及している。また、非言語情報を調査対象とする必要性について、吉岡(2009)が言及している。したがって、本研究では言語形式に加え、パラ言語情報と非言語情報を研究対象とする。

本研究は、コミュニケーションストラテジー研究としての「聞き返し」に、気持ちを伝える音声教育の観点を取り入れた、実証研究である。そして先行研究を踏まえ、(1)日本の大学院に通う超級レベルの学習者を調査対象者としたときの、1対1の会話で使われる「聞き返し」の表現、(2)「聞き返し」の表現形式と「聞き返し」の印象、(3)「聞き返し」の表現形式と「聞き返し」の表現意図、(4)「聞き返し」の具体的な練習方法及び有効な「聞き返し」方、(5)「聞き返し」のパラ言語情報、(6)「聞き返し」の非言語情報の6点に新たに着目した研究である。

3.研究目的と研究方法

本研究が明らかにするリサーチクエスチョン(以下、RQ)は次の4点である。

RQ1:「聞き返し」において、表現主体の表現意図と、理解主体が認識する表現主体の表現意図にどのような違いが生じるか。

RQ2:「聞き返し」において、表現主体の表現意図と、理解主体が認識する表現主体の表現意図に違いが生じる要因は何か。

RQ3:「聞き返し」において、表現主体が理解主体からどのような意図せぬマイナスの印象を持たれるか。

RQ4:「聞き返し」において、表現主体が理解主体から意図せぬマイナスの印象を持たれる要因は何か。

本研究における調査協力者は、日本語非母語話者(以下、NNS)4名と日本語母語話者(以下、NS)3名の計7名である。NNSはいずれも日本の大学院に通う中国語母語話者である。母語による「聞き返し」の違いは本研究において考慮しないため、NNSの母語は中国語に統一した。日本語レベルによる「聞き返し」の違いも本研究において考慮しないため、調査協力者は日本の大学院に通う超絶レベルのNNSに統一した。年代差による「聞き返し」の違いも本研究において考慮しないため、調査協力者の年齢は20代に統一した。また、親疎関係を一定にするため、本研究で会話をするNNSとNSは、同じ研究室に所属し、今後さらに親しくなることを前提としている大学院生二人組である。

本研究では、調査手順は三つある。一つ目は、会話場面の録画、録音である。会話のテーマは、「調査協力者が所属する研究室に関する企画」とし、会話は約20分間録画、録音した。二つ目は、筆者が録画、録音データから「聞き返し」と思われる箇所を抽出することである。三つ目は、質問用紙を使用したインタビュー調査である。インタビュー調査は、調査協力者とともに会話場面の録画映像を見ながら、筆者と調査協力者1名の計2名で行った。会話場面の録画、録音とインタビュー調査は、2015年6月から8月にかけて行った。文字起こしの際、パラ言語的行動と非言語行動も記す工夫をした。ザトラウスキー(1993)を参考にし、文字起こしを行った。

4.結果の考察と結論

本調査から検出された、表現主体の「聞き返し」の表現意図は18種あり、総数は120件であった。本調査から検出された、理解主体が認識した「聞き返し」の表現意図は16種あり、総数は132件であった。本調査から検出された、表現主体が与えたかった「聞き返し」の印象は3種あり、総数は37件であった。本調査から検出された、理解主体が受け取った「聞き返し」の印象は9種あり、総数は61件であった。

RQ1である『「聞き返し」』において、表現主体の表現意図と、理解主体が認識する表現主体の表現意図にどのような違いが生じるか」に対する答えは、以下のとおりである。

- (1)表現主体が「言葉の意味はわかるが、相手の話の内容を教えてほしい、説明を加えてほしい」という表現意図を表した場合、理解主体は「驚きの表明」という表現意図であると認識した。
- (2)表現主体が「不満の表明」という表現意図を表した場合、理解主体は「相手の言っていることを理解していると伝えたい」という表現意図であると認識した。

(3)表現主体が「驚きの表明」と「相手の発話の意図を教えてほしい」という表現意図を表した場合、理解主体は「相手の言っていることを理解していると伝えたい」という表現意図であると認識した。

(4)表現主体が「相手の意見に反対していると伝えたい」という表現意図を表した場合、理解主体は「相手の意見に賛成していることを伝えたい」という表現意図であると認識した。

(5)表現主体が「もう一度言ってほしい」と「自分の理解で合っているか確認したい」と「驚きの表明」という表現意図を表した場合、理解主体は「驚きの表明」という表現意図であると認識した。

(6)表現主体が「聞き返し」ではなく、独り言を言った場合、理解主体は「聴解が合っているかどうか確認したい」という表現意図であると認識した。

RQ2 である『『聞き返し』において、表現主体の表現意図と、理解主体が認識する表現主体の表現意図に違いが生じる要因は何か』に対する答えは、以下のとおりである。

(1)理解主体に伝わりにくい表現意図を表そうとしていること。

(2)複数の表現意図を表すのに使用される表現形式のみを表現主体が使用すること。

(3)表現主体が意識して表した表現形式と、理解主体が着目した表現形式が異なること。

RQ3 である『『聞き返し』において、表現主体が理解主体からどのような意図せぬマイナスの印象を持たれるか』に対する答えは、以下のとおりである。

(1)表現主体が与えたかった印象が「ない」場合、理解主体は「こわい」という印象を持った。

(2)表現主体が「親しい」印象を与えたかった場合、理解主体は「無礼」という印象を持った。

(3) 表現主体が与えたかった印象が「ない」場合、理解主体は「親しい」という印象と「冷たい」という印象を同時に持った。

(4) 表現主体が与えたかった印象が「ない」場合、理解主体は「冷たい」という印象を持った。

(5) 表現主体が与えたかった印象が「ない」場合、理解主体は「気持ちが悪い」という印象を持った。

RQ4 である『『聞き返し』において、表現主体が理解主体から意図せぬマイナスの印象を持たれる要因は何か』に対する答えは、以下のとおりである。

(1)「聞き返し」た言葉のアクセントが変化すること。

- (2)理解主体が予期せぬ「聞き返し」が起こること。
- (3)理解主体とは違う感覚を持っていることがわかること。
- (4)理解主体が、自分の意見が否定されたように感じる事。
- (5)「相手の言葉の一部を繰り返す」「大きい声で言う」「文末イントネーションを上げる」「相手の目を見る」「前のめりになる」という5種の表現形式を全て使って聞き返されること。
- (6)珍しいものを見るような目をする事。
- (7)「ん」と「え」の間の変な音を発すること。
- (8)「大きい声で言う」という表現形式を使って聞き返されること。
- (9)「大きい声で言う」「文末イントネーションを上げる」という2種の表現形式を使って聞き返されること。
- (10)「全身をプルプルさせる」こと(肩を前後に大きく動かし、全身を揺らすこと)。
- (11)「高い声で言う」「相手の目を見る」という2種の表現形式を使って聞き返されること。

5.日本語教育への示唆と今後の課題

本研究から、「聞き返し」の表現主体の表現意図は約43.4%(106件中46件)理解主体に伝わっておらず、「聞き返し」の表現主体の表現意図が理解主体に伝わらないことによりコミュニケーション上の問題が生じている場合があることが明らかになった。会話において円滑なコミュニケーションを行うために、「聞き返し」で表される表現意図、表現形式、および表現意図と表現形式の関係性を理解しておくことが必要である。そのために、「聞き返し」の表現意図と表現形式に着目した指導の在り方を検討した。

本研究では、表現主体が理解主体に意図せぬマイナスの印象を持たれた「聞き返し」が約8.5%(106件中9件)検出された。学習者が「今後さらに親しくなる」関係にある相手と日本語で会話をする際、意図せぬマイナスの印象を持たれないために、「聞き返し」によって持たれる意図せぬマイナスの印象とその表現形式を知り、理解しておくべきである。そのために、マイナスの印象に繋がる表現形式を使った「聞き返し」を実際に見て話し合う指導の在り方を検討した。

本研究から、「聞き返し」を表現主体が表す際に、言語形式に加え、パラ言語情報と非言語情報を使用していることが明らかになった。また、理解主体が「聞き返し」を認識する際にも、言語形式に加え、パラ言語情報と非言語情報に着目していることが明らかになった。

日本語学習者が「聞き返し」の表現形式を理解し、伝えたい表現意図と与えたい印象に応じて「聞き返し」を使えるようになるためには、言語形式に加え、パラ言語情報と非言語情報の持つ役割を知り、理解しておくべきである。そのために、パラ言語情報と非言語情報の指導の在り方を検討した。

本研究における今後の課題を二つ提示する。一つ目は、「聞き返し」の表現意図と表現形式の調査の追加である。二つ目は、本研究の結果から提案した指導の実践研究である。

6.主な参考文献

- 尾崎明人(1992)「『聞き返し』のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』 pp.251-263.
- (2001)「接触場面における在日ブラジル人の『聞き返し』とその回避方略」『社会言語学』第4巻第1号 pp.81-90.
- 許挺傑(2013)「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖についての一考察—聞き返し連鎖定義の再検討と学習者の使用実態—」『筑波応用言語学研究会』第20号 pp.16-29.
- ザトラウスキー, ポリー(Szatrowski, P.) (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版.
- 戸田貴子(2002)「パラ言語情報の伝達と日本語音声教育—あいづちの音声に関する考察—」『早稲田大学日本語教育研究』第1号 pp.41-61.
- トムソン木下千尋(1994)「初級日本語教科書と『聞き返し』のストラテジー」『世界の日本語教育』第4号 pp.31-43.
- 堀内奈美(2011)「接触場面における『聞き返し』のストラテジー—日本語非母語話者の学習レベルの相違による特徴—」『四天王寺大学紀要』第51号 pp.307-322.
- 吉岡慶子(2009)「第二言語習得研究におけるジェスチャー研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第12号 pp.127-144.